

I

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

ある心理学者の書いた『創造性の開発』という本に、こんな問題が出ている。ゆつくり読んで、解決法を考えていただきたい。「ここに、三つの小さなボール紙の箱がある。そのひとつには、ローソクが三本、ひとつには、画びょうが三つ、そしてもうひとつにはマッチがはいっている。これを使って、三本のローソクを壁にとりつけて灯をとすにはどうしたらよいか」

とにかく、ローソクがあり、マッチがあるのだから、火をつけることは、べつだんむずかしいことではない。しかし、そのローソクを壁にとりつける、ということになると、ハタと行きづまってしまう。

なるほど、画びょうという、思わせぶりなものがあるから、くつつける方法がありそうにみえる。しかし、かりに、ローソクがきわめて細くて、画びょうの針の部分が高く、ローソクを針で突きとおして壁につけることができたとしても、ローソクは、壁に沿って密着することになるから、壁は燃えてしまうだろう。不燃性の材料でできた壁であっても、ススだらけになる。お義理にも「照明」などといえたものではない。

そこまで考えて、われわれは、サジを投げる。壁に燭台しよくだいでもついているなら、問題はないけれど、こんな変な道具立てで、ローソクを立てることなんかできやしない——われわれの多くは、そう考える。そして、そういうふうを考えるのが常人の常識というものだ。

しかし、^A創造的にものを見ることのできる人なら、この材料を使って、ちゃんとローソクを壁にとりつけることができる、と、この心理学者はいう。どうやったらいいのか。

まず、ローソクその他を小箱から出す。**B**、その小箱の内がわから画びょうを突きさし、そのまま壁にとりつける。小箱が壁にくっついていれば、それは燭台になる。箱のうえにローソクを立てれば、それで、でき上りである。ローソクの灯は、ほのかに室内を照らすであろう。

そういわれると、われわれは、なあんだ、そんなことなら、自分^cにだってできる、バカにしてら、といったような反応をおこす。さよう、きいてみれば、解決法は、あつけないほど簡単である。わたしだって、そのくらいのことではできる。もちろん、あなたにもできる。

しかし、大事なことは、はじめに問題を讀んだとき、われわれの大部分が、頭をひねり、あれこれと考えながら、結局はダメだと投げ出してしまった、という事実である。きいてみて、なあんだ、とつぶやいてみても、もうおそい。とにかく、この解決法をおしえてもらうまで、われわれは、この問題は解けない、^Dと思ひこんでいた。その事実をすなおにわれわれはみとめなければならぬ。要するにコロンプスの卵とおなじである。

ところで、このコロンプスの卵の現代版の話に似たエピソードは、ほかにもある。またぎきなので、不正確かもしれないが、こんな話をわたしはきいた。

E

いったい、どうしたらいいのか。

そのとき、隊長のN博士は、車内でお湯を沸かすことを命じた。そして、お湯ができると、それを車外に持ち出し、破損した部品をきちんと雪の上に置いて、それにお湯をかけた。^F、零下何十度の酷寒である。お湯はたちどころに凍って、部品の破損部分はカチカチにかたまった。

そのカチカチの部品を、あらためて機械のなかに組みこむと、ちゃんとうごいた。これだけ外気温が低いと、氷は、たいていの金属よりも硬く、こわれにくくなるのだ。雪上車は、こんなふうにして、氷の部品を使って、無事にうごきだし、基地に帰ってきたのだ。話をきくと、なるほど、と思う。これもコロンプスの卵である。

さきほどのローソクの話と、この話とのあいだには、ひとつの共通点がある。それは、いずれの場合にも、^Gだ。あるいは、普通の人間が、普通の状態でもっている「思いこみ」の枠をつき破っている、ということだ。

ローソクの例でいえば、われわれは、はじめから、二つの小箱があることを知っていた。しかし、われわれは、それらの小箱が、ローソク、画びょうなどをいれておくための「いれもの」だ、というふう^にに思いこんでいた。それらは、中身を出した瞬間に無用のもの、としてとりあつかわれていた。それが、「常識」というものであり、「いれもの」としての小箱が、頭のなかから、無用のものとして消去されている以上、この小箱を燭台として利用する可能性は思いつくことができなかつたのである。

雪上車の場合にも、事情はおなじだ。部品がこわれた、ということになると、すぐに予備の部品をさがす。それがなければどうにもならない。およそ、機械部品というものは硬い金属でつくられているものである——それがわれわれの「思いこみ」だ。したがって、予備部品がないかぎり、もうダメだ、と考える。

しかし、零下何十度の寒さのなかでは、氷がなまじの金属よりも硬い、ということ^をを思いついたとき、事態は一変するのである。捨てたはずの小箱が燭台に使える、と考^ええついたらときに、ローソクは立てられるのである。くだいようだがあとで話をきけば、な^あんだ、ということであるにすぎない。きわめて、話は簡単なのである。だが、われわれの多くは、常識の枠のなかでしかものを考^ええていないから、おおむね、「解決」にむかうことができず、お手上げになつてしまふのである。

こんなふう^にに、一般的な「思いこみ」を破つた思考によつて問題解決にいたることを「創造」という。「創造的」な人間というのは、既存の思考枠を、いったん白紙にもどして、はじめから考^ええなおしてみることで^きできる人間のことで^ある。

(中略)

たぶん、人間にとつて、いちばん大事な能力^{とい}うのは、創造の力なのである。実際、ありきたりの知識だの情^報だの^{とい}うのは、今日の社会では、それほど重要なものではない。情報の性質によつては、その記憶や再生は、コンピューターにまかせておくこと^がだつてできる。人間の頭脳は、創造、^{とい}う、もつとも高度で人間的な^はたらきのために使うべきなのである。創造的な活動のできる人こそが、もつとも、人間としての充^実を感じることで^きできる人でもあるのだ。

H^{ひけつ}、このような創造的思考をするためには、どうしたらよいのか。常識を疑い、既存の観念の枠組みにと^らわれないことがその秘訣だ、など^{とい}つて^みても、なかなか、常識でこ^り固^まつたわれわれが、いきなり創造的になること^なんか、できた相談で

はない。やっぱり、ほんとうに創造的であるためには、幼いときから、創造力を養うような訓練が必要だ。おとなになってから、創造的思考を身につけることも不可能ではないけれど、子どものうちからその訓練をうけておくほうが、はるかによろしい。創造力の問題は、わたしのみるところでは、教育の問題でもあるのだ。

そのことは、教育についての最高責任者である国家も、ちゃんと気がついていらっしやる。だから、教育の根本をさだめた「教育基本法」もその前文に、こう書いている。

「われらは、個人の尊厳を重んじ、真理と平和を希求する人間の育成を期するとともに、普遍的にしてしかも個性ゆたかな文化の創造をめざす教育を普及徹底しなければならない」

I、この「基本法」は、第二条で、くりかえし、こうもいう。

「……学問の自由を尊重し、實際生活に即し、自他の敬愛と協力によって、文化の創造と発展に貢献するように努めなければならない」

わたしは、こうした条文を読むにつけ、たのもしい思いになる。なんべんもくりかえし、日本の法律は、教育における「創造」の重要性を語っていてくれるからだ。

しかし、法律にそう書いてあるということと、実際の教育が「創造」に重点をおいているかどうか、ということは、まったく別問題だ。そして、わたしの考えでは、今日の日本の教育は、あんまり子どもの「創造力」をそだてることに熱心ではないのである。そのことを、わたしは、このごろの若い世代の人たちとの会話から学んだ。

わたしは、若い十代の人たちと、NHKのテレビ番組で語りあう機会があった。この人たちは、ことし大学にはいったばかりの人たちである。さぞかし、自由な大学生活をエンジョイしているにちがいない、というわたしの思いこみは完全に裏切られた。彼らは、よろこんでいるどころか、むしろ当惑しているのである。彼らのひとりはおよそ、こんなことをいった。

大学にはいってみたら、すべて高校までの学校生活と違ってがちがう。高校までは、ああしろ、これを覚えろ、と、とにかく、つめこみ教育ばかりで、それを無我夢中ですごしてきたのだが、大学にはいってみると、学問というのは、それぞれの個人が勝

手にやるものだ、と突き放されてしまう。その突放しは、まさしく「自由」というものにちがいないのだが、いきなり「自由」にやれ、といわれても、小学校から高校まで、およそ、「自由」な勉強など、したことがないのだから、途方にくれてしまう。

このことばをきいて、わたしは、みずから反省した。この若ものの言い分には、まことにもつともなところがあるからだ。

実際、わたしなども、大学にいたとき、若い新入生たちに、大学というところは手とり足とり、あれこれと「教える」場所ではなく、ひとりひとりが、みずからの自発性によって「学ぶ」ところなのである、といったお説教をしたことがいくたびもある。そして正直なところ、学生たちがまったくいいほど「創造性」を持ちあわせていないことに腹を立てた。なにからなまでに、こつちを頼り切っている。既存のものを、ただ、つまらなそうな顔つきで、受動的に丸暗記することだけが勉強というものだ、と思いきんでいる。例のローソクの話などもち出して話してみても、キョトン、としている。「創造」などということと、あんまり縁がなさそうなのである。

しかし、それは、考えてみれば、まったく無理からぬことなのであった。自分の力で考えるということが、日本の教育には、ほとんどないのである。中学生は高校の受験、高校生は大学受験のための勉強に必死になっていて、とにかく、あらゆることを、無批判に暗記することだけに忙殺されている。教育というものは、ほとんど例外なしに、他律的なのだ。生徒は、ガンガンとつめこまれる、あらゆる知識を、ただおぼえこむ記憶機械のようなものだ。

たまに、ぼんやりとものごとを考え、疑問をもつ若ものがいても、そういう疑問に先生は、めったに答えない。そんな生徒がいたりすると、先生は、かえって怒り出し、バカなことを考えるな、とにかく、これをおぼえろ、おぼえないと大学に行けないぞ、式のそっけないことをしか答えてくれない。

どんなことであれ、「なぜ」を問うことは創造性の第一歩である。既存のものを疑って見ないことには、あたらしい観念を生み出すことはできない。「なぜ」という問いを、そのままうけとめて、いっしょに考えるのが、わたしなどのみるところでは、そもそも教育者というものの役目なのだが、一般にいつて、今日の教育者——いや、むかしから教育者というのはそういうものなのかもしれないが——は、「なぜ」という問いに答えようとしなない。

わたしにも、そのおぼえがある。わたしは大学で簿記というものを習ったのだが、おカネがもうかればもうかるほど、簿記では「借方」というのが大きくなる。借りる、というのは、日常語ではマイナスを意味する。なぜプラスを「借方」というのか。わたしは、先生のところにききに行った。先生は、ゲラゲラ笑い出し、むかしからそうになっているのだよ、そういう約束なんだ、と答えられた。わたしは失望した。むかしからそうになっている、などというのは、問いにたいする答えにはならない。その瞬間から、わたしは、簿記というものをやめることにした。もしも、あのときに、納得のゆく答えを得ていたら、わたしは、ひよつとすると、有能な経理の専門家になって、いまごろ、どこかの商社で、課長さんくらいになっていたかもしれない。

だいが横道にそれてしまったけれども、創造性への芽とでもいうべき、あらゆる疑問を、日本の教育は、もっぱら圧殺してしまっているのである。せつかくそだつてゆきそうな芽を、学校は、どちらかといえば、チョンチョンと切りとつてしまう。そだつはずがない。

その結果、われわれ日本人は、おしなべて、さっぱりおもしろくない。小手先のことはともかく、ほんとうにひとをびっくりさせるような「創造」がない。おとなたちは、つまらなそうな顔つきで、毎日、満員電車にゆられることを宿命と思いこんでいるし、若ものたちの表情にも活気がない。「創造」を、あんなにもうつくしい文章で綴った教育基本法は、どこかに行ってしまったらしいのである。

(加藤秀俊 『独学のすすめ』 筑摩書房 二〇〇九年より引用 問題作成の都合上一部変更)

問一 傍線部A「創造的にもものを見ることのできる人」とはどのような人か。本文の内容に即して最も適切なものを次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は **1**。

- ① ちゃんとローソクを壁にとりつけることができる人
- ② どんな材料からでも、ローソクを壁にとりつけることができる人
- ③ どんな状況においても既存の概念の枠組みを捨てることができる人
- ④ 既存の思考枠を、いったん白紙にもどして、はじめから考えなおしてみることのできる人
- ⑤ ほかの人が考え付かないよう突飛なことを考えられる人

問二 空欄部 **B**、**F**、**H**、**I**に入る語句の組み合わせとして、最も適切なものを次の①～⑤の中から一つ選びな

さい。解答番号は **2**。

- ① B…そして F…ところで H…つまり I…さらに
- ② B…そして F…なにしろ H…しからば I…さらに
- ③ B…そして F…なぜなら H…つまり I…しかし
- ④ B…つぎに F…なにしろ H…なぜなら I…しかし
- ⑤ B…つぎに F…なぜなら H…そして I…しかし

問三 傍線部C「そんなこと」とありますが、「そんなこと」の具体的な内容を次の形式にしたがって四十字以内で記しなさい。ただし、「小さなボール紙の箱」、「燭台」、「壁に沿って密着」の三語を必ず用いること。解答欄は **国語解答用紙**。

四十字以内

火を灯すこと。

問四 傍線部D「コロンブスの卵」とはどのような意味で用いられる言葉か。最も適切なものを次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は **3**。

- ① どちらが先にできたものであるかを問う意味
- ② 一見、わかりやすいことでも、実は難しいこともあるという意味
- ③ 誰にでもできることをむずかしくみせることができるという意味
- ④ 誰にでもできることでも、初めて何かをするときは難しいという意味
- ⑤ 解けないと思い込んでいるうちは、いつまでも答えにたどりつくことができないという意味

問五 空欄部 E には、次の枠内のイ〜へで構成された文章が入る。論旨が通る順に並べ替えたものとして、最も適切なものを

①〜⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 4。

イ なにしろ、まわりは白一色の巨大な冷凍庫のような南極である。

ロ このままエンコをつづければ隊員一同凍死するにきまっているし、基地を無電で呼び出しても救助作業は手間どるだろう。

ハ 何年かまえのこと、日本の南極観測隊が雪上車で南極大陸の踏査にあたっていた。そとは、零下何十度という寒さである。

ニ もしも予備の部品があれば、すぐに修理ができる。隊員たちは、部品をさがしたが、そんなものは、ひとつもない。すっかり途方にくれてしまった。

ホ ところが、ちよつとした故障で、雪上車がエンコしてしまった。ちよつとした故障、というのは、雪上車をうごかす機械部分の破損である。

ヘ ハイウエーではないから、ほかに、通りかかる車なんかあるはずがない。基地からは、何百キロもはなれている。

- ① イ ↓ ロ ↓ ヘ ↓ ホ ↓ ニ ↓ ハ
- ② イ ↓ ヘ ↓ ホ ↓ ニ ↓ ロ ↓ ハ
- ③ ハ ↓ ホ ↓ ニ ↓ イ ↓ ヘ ↓ ロ
- ④ ハ ↓ ヘ ↓ イ ↓ ホ ↓ ロ ↓ ニ
- ⑤ ハ ↓ イ ↓ ロ ↓ ニ ↓ ホ ↓ ヘ

問六 空欄部 **G** に入る文章として、最も適切なものを次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は **5**。

- ① 解決法が「常識」を超えている、ということ
- ② 解決法があっけないほど「簡単」である、ということ
- ③ 解決法が「常識」の枠組みにおさまっている、ということ
- ④ 解決法が普通の人間に「簡単」に解けるものである、ということ
- ⑤ 解決法に「専門的な知識」を必要としている、ということ

問七 傍線部J「この若ものの言い分には、まことにもつともなところがある」と考えられている理由として、最も適切なものを次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は **6**。

- ① 実際に大学で学ぶと、受動的に丸暗記する勉強ばかりであるため。
- ② 今日の日本の法律は、あんまり子どもの「創造力」をそだてることに熱心ではないため。
- ③ 自分の力で考えるということが、日本の教育には、ほとんどないため。
- ④ 大学というところは手とり足とり、あれこれと「教える」場所ではないため。
- ⑤ 法律では、教育における「創造」の重要性が示されており、実際の教育も「創造」に重点をおいているため。

問八 次のイ〜ニの文章のうち、本文中の筆者の主張に合致する文章の組み合わせとして、最も適切なものを次の①〜⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 7。

イ 創造的力の問題は、教育の問題でもある。

ロ 常識を疑い、既存の観念の枠組みにとられないことが創造的であり続けるための秘訣だ。ひけつ

ハ おとなになってから、創造的思考を身につけることは不可能である。

ニ 今日の日本の教育は、子どもの「創造力」を育てることに熱心とはいえない。

① イ・ロ

② ロ・ニ

③ イ・ニ

④ ロ・ハ・ニ

⑤ イ・ロ・ニ

問九 次の1～5の傍線部にあてはまる漢字を、それぞれ①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は

8

く

12

1 未知パラメータをスイテイする。

8

- ① 底
- ② 低
- ③ 体
- ④ 定
- ⑤ 抵

2 自動車のコンカン部品であるエンジンが故障した。

9

- ① 幹
- ② 管
- ③ 感
- ④ 冠
- ⑤ 完

3 患者の病状はカイホウにむかった。

10

- ① 邦
- ② 法
- ③ 報
- ④ 放
- ⑤ 方

4 企業間で共同開発をヤクジョウする。

11

- ① 場
- ② 条
- ③ 定
- ④ 状
- ⑤ 上

5 政治家が無駄に地方をユウゼイする。

12

- ① 勢
- ② 性
- ③ 絶
- ④ 正
- ⑤ 説

II 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

終章として、このような時代を生きている私たちにとって、リベラルアーツを学ぶことの意味合いを、改めて述べたいと思います。

ここで結論を先に述べてしまえば、その理由は、

現代をしたたかに生きていこうとするのであれば、リベラルアーツほど強力な武器はない。何らかの形で組織やシステムに関わる立場にある人であれば、リベラルアーツを学ぶことは、おそらく人生において最も費用対効果の高い投資になるであろう。

ということになるかと思えます。以下に、右の論拠について筆者の考えを述べたいと思えます。

まず読者の皆さんに一つ質問をしてみたいと思えます。その質問とは「金利はなぜプラスなのか？」というものです。おそらく多くの人の答えは「お金の借り手は、貸し手が失った機会分の費用を負担しなければならぬ」というものでしょう。確かに、現代を生きる私たちにとって「金利はプラスである」ということは常識となっております。しかし、調べてみればすぐに、これが現代にしか通用しない常識だということがわかります。

A、中世ヨーロッパや古代エジプトではマイナス金利の経済システムが採用されていました。マイナス金利ということはつまり、銀行にお金を預けるとどんどん価値が目減りしてしまう、ということなのです。こういう社会では現金を持ち続けることは損になる、ということ、当然のことながら、現金は入ってくると同時になるべく他のものと交換しようという誘因が働くことになりません。

では、どのようなものと換えるのが良いでしょうか。食べ物？ いや、食べ物は難しい。一度に食べられる量には限りがありますし、残った食べ物は保存が必要になるわけですが、当時は冷蔵庫もない時代で保存できる量には自ずと限りがあります。ではモノにするか？ モノなら何がいいだろうか？ こうやって考えていくと、やがて誰もが同じ結論に至ることになります。そう、長いこと富を生み出す施設やインフラにお金を使おうという結論です。このような思考によって進められたのがナイル川の灌漑事業かんがいであり、中世ヨーロッパでの大聖堂の建築でした。この投資が、前者は肥沃なナイル川一帯の耕作につながってエジプト文明の発展を支え、後者は世界中からの巡礼者をあつめて欧州全体の経済活性化や道路インフラの整備につながっていったのです。

リベラルアーツを、社会人として身につけるべき教養、といった薄っぺらいニュアンスで捉えている人がいますが、これはとてももったいないことです。本書で再三にわたって指摘してきた通り、リベラルアーツのリベラルとは自由という意味であり、アーツ(アーツ)とは技術のことです。改めて確認すれば「リベラルアーツ」とは「自由になるための技術」ということなのです。

では、ここで言う自由とは何のことでしょうか？ もともとの語源は新約聖書のヨハネ福音書の第八章三二節にあるイエスの言葉、「真理はあなたたちを自由にする」から来ています。

「真理」とは読んで字のごとく、「真の理(IIことわり)」です。時間を経ても、場所が変わっても変わらない、普遍的で永続的な理(IIことわり)が「真理」であり、それを知ることによって人々は、その時、その場所だけで支配的な物事を見る枠組みから、自由になれる、と言っているのです。その時、その場所だけで支配的な物事を見る枠組み、それは例えば「金利はプラスである」という思い込みです。つまり、目の前の世界において常識として通用して誰もが疑問を感じることなく信じ切っている前提や枠組みを、一度引いた立場で相対化してみる、つまり「問う」ための技術がリベラルアーツの真髄ということになります。

これがなぜ社会を生き抜くための功利的な武器となりうるのでしょうか？ 答えは「なぜならイノベーションには『相対化』が不可欠だから」ということになります。過去のイノベーションを並べてみると、そこに何らかの形で、それまでに当たり前だと思っていた前提や枠組みが取り払われて成り立っていることに気づきます。

パソコンの販売では店頭シェアがカギだ、という前提が支配する中で、その前提にこだわって破綻したコンパックと、その前提から離れてダイレクト販売というモデルを確立して業界を支配したデル。

モノをいちばん速く運ぶのは最短経路だ、という前提が支配する中で、その前提にこだわって消えていった多くの零細運送事業者と、ハブ&スポークという物流システムを確立して成長したフェデックス。

パソコンには入力機器と記録媒体が必要だ、という前提にこだわって価格競争の泥沼で苦しんでいる多くのPCメーカーと、その前提から離れてiPadを開発したアップル。

イノベーションというのは常に「それまでは当たり前だと思っていたことが、ある瞬間から当たり前ではなくなる」という側面を含んでいます。つまりイノベーターには「当たり前」を疑うスキルが必要なのです。ハーバード・ビジネス・スクールのクレイトン・クリステンセンは、著書『イノベーションのDNA』の中で、イノベーターに共通する特徴として、誰もが当たり前だと思っていることについて「Why?」を投げかけることができる、という点を挙げています。

確かに、数多くのイノベーションを主導したアップルの創業者スティーブ・ジョブズは、いつもこの「Why?」という疑問を周囲のスタッフに投げかけていたことで知られています。その彼が、常々アップルを、テクノロジーとリベラルアーツの交差点に位置する会社になりたい、と語っていたのは偶然ではありません。リベラルアーツというのは相対化の技術であり、相対化することによって初めて人は、誰もが常識だと思っている世界のありようについて、なぜそうなのか？ なぜ他のやり方ではないのか？ という問いを持てるのです。

しかし一方で、すべての「当たり前」を疑っていたら日常生活は成り立ちません。どうして朝になると自然に目が醒めるのだろう、どうして人間は昼間に働き、夜に休むようになったのだろう……。いちいちこんなことを考えていたら哲学者にはなれるかも

しませんが、個人としては破綻してしまうでしょう。ここに、よく言われる「常識を疑え」という陳腐なメッセージのアサハカさがあります。常識を疑うのはじつはとてもコストがかかるのです。一方で、イノベーションを駆動するには「常識への疑問」がどうしても必要になります。このパラドックスがなかなか解けないからこそイノベーションは難しいのです。

結論から言えば、このパラドックスを解くカギは一つしかありません。つまり、重要なのは、よく言われるような「常識を疑う」という態度を身につけることではなく、「見送っていい常識」と「疑うべき常識」を見極める選球眼を持つということなのです。そしてこの選球眼を与えてくれるのがまさにリベラルアーツなのです。リベラルアーツというレンズを通して目の前の世界を眺めることで、世界を相対化し、普遍性がより低いところを浮き上がらせる。ステイブ・ジョブズは、カリグラフィの美しさを知っていたからこそ「なぜ、コンピューターフォントはこんなにも醜いのか？」という問いを持つことができたのですし、チェ・ゲバラはプラトンが示す理想国家を知っていたからこそ「なぜキューバの状況はこんなにも悲惨なのか」という問いを持つことができたのです。

目の前の世界を、「そういうものだ」と受け止めてあきらめるのではなく、比較相対化する。そうすることで浮かび上がってくる「普遍性のなさ」にこそ疑うべき常識があり、リベラルアーツはそれを見るレンズとしてもっともシャープな解像度を持っているのです。

いまこの瞬間の世界のありようを前提にして、その中でいかに功利的に動くか、という問題意識に、現代人の多くは囚われすぎているように思えます。世界のありようについて、その是非を問わず、「そういうものだ」と割り切って自分を変えろというアプローチを、特にエリートと呼ばれる人は取りがちです。そのようなアプローチの末に、めでたく高額の収入と他者からの尊敬を同時に勝ち取る人が多いのも確かです。E、「勝ち組」と言われる人を見て、彼らがしたのと同じような努力を積み重ねようとする他者が次から次へと現れ、そのような人々をカモにしようとする書籍やコンテンツが書店のビジネス書コーナーに溢れ（あふ）ています。

しかし気をつけなければなりません。世界のありようは常に変化しており、昨日うまくいった勝ちパターンは一瞬で無効化され

ます。かつての世界においてうまくいった闘い方が、ある日突然まったく通用しなくなってしまうということがいつ起こるかもしれないのです。

近年での典型事例はリーマンショックでしょう。二〇〇〇年代、多くのビジネススクール卒業生は投資銀行の門をたたき、「バカロ色の人生=La Vie en Rose」ともいうべき華々しいキャリアを築こうとしました。しかし祝宴は唐突に終わりを告げ、世界のありようは変化してしまいました。変化する前の、いわば「旧世界のありよう」に最適化すべくスキルと知識を積み重ねてきた多くの人は、いわば「世界に裏切られ」て、野に放り出されてしまったのです。投資銀行というのは極めて特殊な職場で、求められるノウハウやスキルの普遍性は高くありません。彼らの多くは、放り出された荒野から、ふたたび人生を歩み始めるために、異なるスキルやノウハウを身につけることを強いられていますが、これはじつに過酷なことです。

リーマンショックによって職にあぶれた投資銀行マンはほんの一例に過ぎません。世界というものは気まぐれに人を裏切るので。だからこそ、我々は、七転八倒しながらも取っ組み合いをしている世界に振り回されないための、いわば「F」を養わなければなりません。世界のありように目を向けて自分のキャリアや立ち居振る舞いを設計するのではなく、世界のありようについて一応は適応しつつも、それを相対化しながらたかに立ち回って変革の機会を待ったための「F」が必要なのです。そして、そのような「G」はリベラルアーツを学ぶことでしか身につけることができないと筆者は考えています。

新型コロナウイルスによる「^H仮想空間シフト」が進んだことによって、物理的な場所の制約がどんどん解除されています。これはつまり、国境をまたいでいろんな国の人々と仕事をするためのインフラがどんどん整備されている、ということなのですが、一方で、このようなインフラを使いこなすための「人間側の整備」はなかなか進んでいません。私は、このような世界において異なるバックグラウンドや価値観を持っている人と正確かつ効率的に協働^Iコワークするためには三つの素養が必須となると考えています。

その三つとは英語、論理、リベラルアーツです。英語と論理については説明の必要はないでしょうが、リベラルアーツについては疑問に思われる向きもあるかもしれません。しかし私は、ごく個人的な体験から、リベラルアーツが^Iコミュニケーションを円滑

にするための武器になると感じています。

典型的な例として私の体験を共有しましょう。数年前のことですが、私が欧州での組織改革プロジェクトに参加した際に、クライアント企業の状況についてロンドンの同僚とクライアートのキーマンが以下のようなやりとりをしていました。

同僚コンサルタント …彼はどういうタイプのリーダーですか？

クライアント …彼かい？ リア王だね

同僚コンサルタント …なるほど。ではエドマンドは？

クライアント …S氏だ

同僚コンサルタント …やっぱりそうですか…？ ではコーディネリアは？

クライアント …去年までいたN氏がそうだが、S氏に放逐された

同僚コンサルタント …ああ、では我々がコーディネリアの役割をする必要がありますね

この会話は言うまでもなく、ウィリアム・シェークスピアの戯曲『リア王』を前提にしています。この戯曲において、老王リアは、腹黒い娘二人の意図を見抜けずに寵愛^{ちやうあい}して国をゆずる一方で、真の愛からリアに苦言を呈する末娘コーディネリアを疎んじて追放してしまいます。先の会話はその人間模様を例えとして用いたものですが、筋書きを知らない人にとってはまったく意味不明でしょう。この組織改革プロジェクトが、先の会話を元にしてどんどん進んでいってしまうということを考えれば、ここでクライアント組織の状況について深刻な理解不足が生じてしまうことがおわかりいただけると思います。これは語学力や論理的思考力の問題ではありません。単純に知的バックグラウンドの厚みの話であり、要するにリベラルアーツの問題なのです。先進国で高等教育を受けた人間であればシェークスピアの名作くらいは読んでいて当然だ、という前提で世界中のエリートは議論を組み立ててきます。

おそらく遠く東洋から参加している筆者を値踏みする、という意味もあつたのでしよう。鼻持ちならないエリートのスノビズムだと感じる向きもあるかもしれませんが、しかしこれは立場を変えてみればよくわかる話なのです。例えば、日本人であれば「あの二人の関係は、忠臣蔵の吉良上野介と浅野内匠頭たくみのかみのようだ」と言えば、それだけで複雑な背景説明なしに状況の理解を共有することが可能です。この例え話をして「意味がわかりません」と言われれば、学歴や職歴がどんなに立派であっても「コイツ、そもそも人として大丈夫か?」と思われてしまうでしょう。こういった人間関係や情景を、いちいち噛み砕いて説明していたら、それこそまどろっこしくてしょうがありません。つまりリベラルアーツとはコミュニケーション効率を一気に高めるための一種の圧力鍋として機能するということでもあるのです。

J、グローバルなコミュニケーションが必要となる場で、「リア王」を知らないというのは、日本において仕事をする際に「忠臣蔵」の例えを出されてもわからない、というくらいのコミュニケーションロスになる、ということです。特に、聖書とシェークスピアを筆頭に、ドストエフスキーなどの世界文学は、それを読んでいう前提で欧米のエリートはコミュニケーションをしてきます。一種のリトマス試験紙のようなもので、彼らとしては、ここでプロトコルが共有できないようであれば人間として信用しない、少なくとも自分と同じクラスの人間、仲間とは認めないということです。

(山口周 『自由になるための技術 リベラルアーツ』 講談社 二〇二二年より引用 問題作成の都合上一部変更)

問一 空欄部 A、E、J に入る語句の組合せとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は 13。

- | | | | |
|---|-------|-------|-------|
| ① | A…しかし | E…そして | J…つまり |
| ② | A…しかし | E…だが | J…ただし |
| ③ | A…例えば | E…そして | J…つまり |
| ④ | A…例えば | E…そして | J…ただし |
| ⑤ | A…例えば | E…だが | J…つまり |

問二 傍線部 B 『リベラルアーツ』とは『自由になるための技術』ということなのです」とあるが、著者の見解として最も適切な

ものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 14。

- ① リベラルアーツの日本語訳は、自由になるための技術である。
- ② リベラルアーツを学ぶことは、現代を生きていく上での武器となる。
- ③ リベラルアーツは、各種資格のように個人のスキルとして企業から認められる技術である。
- ④ リベラルアーツを学ぶかどうかは、個人の自由である。
- ⑤ リベラルアーツを学ぶことによつて、自由に職業選択ができるようになる。

問三 傍線部C『当たり前』を疑うスキル」の説明として適切でないものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は **15**。

- ① 疑うべき常識を見極める選球眼
- ② なぜそうなのか? という問いを持つこと
- ③ 「Why?」を投げかけることができるということ
- ④ とにかく、他人の言うことを疑ってかかる態度
- ⑤ なぜ他のやり方ではないのか? という問いを持つこと

問四 傍線部D「そのようなアプローチ」とは具体的にどのようなことを指すと考えられるかを、次の形式に従って三十字以内で記しなさい。ただし、「是非」、「変える」の二語を必ず用いること。解答は **国語解答用紙**。

三十字以内

というアプローチ

問五 空欄部 F、G に入る語句として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 16。

- ① F…知的な足腰 G…知的基礎筋力
- ② F…知的な足腰 G…勝ち組力
- ③ F…常識 G…イノベーション力
- ④ F…常識 G…知的基礎筋力
- ⑤ F…勝ち組 G…勝ち組力

問六 傍線部 H 『仮想空間シフト』が進んだこととあるが、この記述に関する著者の見解として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 17。

- ① 異なるバックグラウンドを持つ人とコミュニケーションを取るには仮想空間が適しているということ
- ② 物理的な場所の制約はほとんど解除されても、直接会うことが重要だということ
- ③ 仮想空間というのは、使いこなすのが難しいということ
- ④ インターネット上で仕事をするのがビジネスの中心となっていくということ
- ⑤ 国境をまたいでいるんな国の人々と仕事をするためのインフラがどんどん整備されているということ

問七 傍線部I「リベラルアーツがコミュニケーションを円滑にするための武器になると感じています」とあるが、この部分のリ

ベラルアーツの説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は **18**。

- ① リベラルアーツとは、相手の話の内容をよく理解できるようになることである。
- ② リベラルアーツとは、世界中のエリートが必ず備えている知識である。
- ③ リベラルアーツとは、単純にいうと知的バックグラウンドの厚みのことである。
- ④ リベラルアーツとは、歴史に詳しくなって会話が円滑に進むことである。
- ⑤ リベラルアーツとは、日本でいうと「忠臣蔵」のことである。

問八 本文の内容に合致しない文章を、次の①～⑤の中から二つ選びなさい。解答番号は **19**。

- ① リベラルアーツを学ぶことは、おそらく人生にとって最も費用対効果の高い投資になる。
- ② リベラルアーツとイノベーションには、なんの関係も見いだせない。
- ③ 投資銀行で働いている人は、極めて高いスキルを持っているので、どの職業にも就くことができる。
- ④ 世界のありようの変化に適應していくためには、リベラルアーツを学ぶことが有効である。
- ⑤ グローバルなコミュニケーションが必要となる場で、リベラルアーツは武器となる。

問九 次の1～5の傍線部にあてはまる漢字を、それぞれ①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は

20

く

24

。

1 人材育成を目的に意図的な配置テンカンがなされた。

- ① 監
- ② 還
- ③ 関
- ④ 換
- ⑤ 環

20

2 古代の謎を解明するためタンサク的調査を行った。

- ① 策
- ② 索
- ③ 作
- ④ 削
- ⑤ 錯

21

3 成長のためにはナイセイが欠かせない。

- ① 正
- ② 制
- ③ 生
- ④ 聖
- ⑤ 省

22

4 キセイ概念にとられすぎてはいけない。

- ① 成
- ② 制
- ③ 正
- ④ 生
- ⑤ 聖

23

5 首相は緊急事態への対応でジントウ指揮をとった。

- ① 当
- ② 頭
- ③ 党
- ④ 塔
- ⑤ 等

24

	解答番号	解答欄					
I	1	①	②	③	④	⑤	5点
	2	①	②	③	④	⑤	5点
	3	①	②	③	④	⑤	5点
	4	①	②	③	④	⑤	5点
	5	①	②	③	④	⑤	5点
	6	①	②	③	④	⑤	5点
	7	①	②	③	④	⑤	5点
	8	①	②	③	④	⑤	2点
	9	①	②	③	④	⑤	2点
	10	①	②	③	④	⑤	2点
	11	①	②	③	④	⑤	2点
	12	①	②	③	④	⑤	2点
II	13	①	②	③	④	⑤	5点
	14	①	②	③	④	⑤	5点
	15	①	②	③	④	⑤	5点
	16	①	②	③	④	⑤	5点
	17	①	②	③	④	⑤	5点
	18	①	②	③	④	⑤	5点
	19	①	②	③	④	⑤	5点
	20	①	②	③	④	⑤	2点
	21	①	②	③	④	⑤	2点
	22	①	②	③	④	⑤	2点
	23	①	②	③	④	⑤	2点
	24	①	②	③	④	⑤	2点

I問三

「小さなボール紙の箱を燭台として利用し、ローソクを壁に沿って密着させずにローソクに」(四十字) 火を灯すこと。
「小さなボール紙の箱を燭台として、ローソクを壁に沿って密着させず」(三十二字) 火を灯すこと。

II問四

「世界のありようについて、その是非を問わず、自分を変える」(二十七字) というアプローチ
「世界のありようの是非を問わず、割り切って自分を変える」(二十六字) というアプローチ